

08/10/25(日)

【第三種郵便物認可】

私の履歴書

岡井隆

24

わたしには原子核エネルギーに関する歌がたくさんあって、二十代から七十代までそれを迎えることができる。広島に原爆が投下された翌日だったと思うが、愛知県刈谷市の製鋼工場に学徒動員で行っていたとき、旧制高校の物理の教官がこの「新型爆弾」が原子核物理に由来していることに、ほんのりと触れた解説をした。工場の広場で、わたしたちに説明する教官の額の汗まで記憶にのこっている。その程度には、理系の人達には予想がついていたのだろう。戦後になつてから、今度は正式に教室で原子核の構造と、そこから解放放たれる莫大なエネルギー

原子核の歌

わたしには原子核エネルギーに関する歌がたくさんあって、二十代から七十代までそれを迎えることができる。広島に原爆が投下された翌日だったと思うが、愛知県刈谷市の製鋼工場に学徒動員で行っていたとき、旧制高校の物理の教官がこの「新型爆弾」が原子核物理に由来していることに、ほんのりと触れた解説をした。工場の広場で、わたしたちに説明する教官の額の汗まで記憶にのこっている。その程度には、理系の人達には予想がついていたのだろう。戦後になつてから、今度は正式に教室で原子核の構造と、そこから解放放たれる莫大なエネルギー

人智の凝縮に驚異抱く

皮肉込めつつ平和利用願う

わたしには、このテーマに關しては世の中の反核・反原子力の考えには、与しがたい気持ちがあり、しばしば反世論的な作品を作ってきた。亡ぶなら核のもとにてわれ死なむ人智はそこに暗くこざれば 『αの星』 という一首は一九八三年ごろの歌だが、核エネルギーの発見には「人智」（人間の知の

力）が暗鬱な形ではあるが凝縮している。自分は、もし亡びるならその力のもとに亡びてもよいと思ひ、あのすばらしい科学技術を平和的に利用すべきだといったのである。むろん多少の皮肉をこめて言い放ったのである。日本が核兵器もて立つ時の近からむとし遠からむとす日本が核を保有しゆらゆら



1980年ごろ

から夜もすがら濃くなりゆくウラン『ウランと白鳥』という歌を含む三十首ほどの連作は、九六年十一月十五日青森県六ヶ所村原子燃料サイクル施設を視察に行ったときに作った。わたしはそのすこし前から、東京電力の主催する研究会に参加して、各界の専門家の話をきいたりしてい

たので、その一環としてこの工場を見学できたのであった。ウラン濃縮施設のすべばに湖があり、白鳥がそこに眠っているさまを歌の中へとり入れたのである。学生のころから、わたしは割と素直に科学理論の美しさを信じ、それを切り開いて来た人間の知力には敬意をもつて来た。学徒動員の工場で休憩時間に愛読したフアラデー『ロウソクの科学』などにはじまり、医学を学ぶ過程で人体生理や病理の機微をつぶさに解明して行く先人たちの学理や実験にも、ふかく学んだと思つている。他面で、その知力には限界があることもよく知つているつもりである。わたしの歌には、そうした人智の矛盾についても、触れて歌ったものがある筈である。プルトニウムの味爽よ来よと思ひけむ希ひけむされど人智さびしき

(歌人)